

カフェ・サイエンティフィックという文化

バーで夜を過ごすなら、科学を理解する心があればもっと楽しい。このような教訓が得られる動きがいま高まりを見せている。ローカルな性格の動きかもしれないが、グローバルに広がる可能性を秘めている。それも低いコストで。

原文：The rise of café culture

Nature Vol.429(327)/27 May 2004; www.naturejpn.com/digest

昨年11月以来、英国ヨークシャー地方の小さな市場町セトルの年中行事カレンダーには、一風変わった項目が加わった。定期的に行われる「科学討論のタベ」だ。例えば、2月の寒い晩、この町に程近いリーズ大学から数学者David Salingerがやってきて、無限の数学的意味について論じた。これが典型的なパブの夜だとは到底思えない。

このような討論会に出かけてくるのはSalingerだけではない。英国とフランスのさまざまな市町村では、夜になると、大学や企業の研究者が、カフェ・サイエンティフィックの定期的な討論会に自主的に駆けつける。5月21日と22日には、このような討論会を主催する人々の会議がニューカッスルアポンタイン(英国)で行われ、この討論会と似たイベントがブエノスアイレス(アルゼンチン)、ワルシャワ(ポーランド)、ヒューストン(米国テキサス州)など世界11カ国の町でも定期的に行われるようになったことが報告された(Nature Vol.429(333)/27 May 2004 参照)。

最初のカフェ・サイエンティフィックが行われたのが1997年だったことを考えると、その広がり目覚しく、歓迎すべきことといえる。これまで欧州各国の政府は、研究者と一

般市民の対話を深める必要性を強調してきた。カフェ・サイエンティフィックの主催者たちは、公的資金をほとんど使わず、中核的な組織もほとんどない状態で、まさにこのことを成し遂げる盛況なイベントのネットワークを作り出したのだ。

だが、中核的な組織からのちょっとした支援があれば、かなり助かるようだ。英国のカフェがネットワークを作れたのはウェルカム・トラストからの175,000ポンド(約3500万円)という少額の助成金があったためだ。この財団からの助成金は、カフェを立ち上げるための経費に使われたため、カフェの活動自体を支えるためには別の支援組織が必要となる。このような助成は、科学コミュニケーションを大切にす組織にとって価値ある投資であることは確かだ。

一方、科学コミュニケーションのプロたちは、カフェ・サイエンティフィックの主催者たちのイベントに対して、拭いがたい不信感を抱いている。カフェ・サイエンティフィックの懐疑論者は、このようなイベントに集まるのが主に中産階級の人々であり、こういう人たちは既に博物館やメディアを通して科学との関わりをもっていることを指摘する。む

しろ科学から排除され、何よりも科学的な争点についての民主的な意思決定過程から排除されていると感じているマイノリティー社会を対象としたイベントを行うべきだと主張しているのだ。

これは正しい主張かもしれない。だが、カフェによって何が達成できるのかという点で誤解がある。各地でイベントの実行に

携わる地元の人々は、自分たちの時間を無償で提供しているのだ。イベントの主催者たちも中産階級の人々がイベントに集まってくることを承知しており、概してその点はさほど気にしていない。所詮、カフェのイベントはプロが行うイベントではない。科学版の読書会であり、科学のファンが科学のファン向けに行っているだけなのだ。

仮にイベントの主催者たちがマイノリティー社会向けのイベント企画に熱心だったとしても、カフェ・サイエンティフィックのような討論形式が目標達成のための最良の手段かどうか疑わしい。科学イベントとしては主流で、既に何度も開催されている博覧会や科学祭に関心を持とうとしない人がマイノリティー社会には多い。主に中産階級で専門職の白人によって企画、運営されているカフェでも結果は同じだろう。

この点での解決のヒントは、むしろ、個々のマイノリティー社会のために作られたプログラムから引き出すべきだろう。英国科学博物館の別館であるデーナセンター(英国ロンドン)がその一例で、ここは科学と文化に関する討論会の会場となっている。

これまでに同センターのスタッフが企画したイベントの一つが、ロンドン市内に居住するバングラデシュ系住民にとっての気候変動をテーマとしたインタラクティブ劇だ。この論点がバングラデシュ系住民と関係が深いのは、故郷の低地が海面の上昇によって壊滅的な被害を受ける恐れがあるからだ。この住民が、ロンドンの中心街を横切ってデーナセンターまでやって来づらいうことに気づいた主催者は、バングラデシュ系住民の居住地区のコミュニティセンターで、劇を上演することにした。当日は活発な討論が繰り広げられ、討論の賛成派も反対派も、同じような劇の上演を今後も続けることを決意したのだ。■

